

幼児の次元形容詞に対する好みについて —太い・細いを中心に—

On the children's liking for some dimensional adjectives

小沢 恵美子

問題と目的

次元形容詞は「大きな木」「深い湖」といった空間的な量や事物の属性を表す場合だけではなく、「心が大きな人」「情け深い」といった心理的なものを表現する場合にも使われる、といった特徴を持っている。また、「大きい—小さい」のように反対の意味を持った対語の構造をしており、研究対象として興味深いものがある。このような特徴を持った次元形容詞を対象に、幼児の言語獲得を考えていくことは、非常に意味あるものと筆者は考える。

次元形容詞についての研究は意味素性仮説 (Semantic Feature Hypothesis Clarke, E. V 1973) に基づいて行われてきた。意味素性仮説はことばの意味獲得に見られる一定の順序性や、習得過程に特有のエラーを説明しようとしたものである。意味素性仮説では、単語の意味は素性からなるもので、子どもは最も一般的な素性を最初に獲得し、後により特殊な素性を獲得するだろう、と獲得の順序性を想定している。

日本語においても意味素性仮説に基づいて、次元形容詞の理解、獲得についての調査、研究が行われてきた。それらの研究結果からは、意味素性仮説を支持する結果も否定する結果も引き出されている (林部 1977、久慈 1981、本郷 1982)。だが注目すべきは、意味素性仮説に基づいた先行研究において、「太い—細い」の判断について共通の特異な結果が見られる点である。意味素性仮説に基づいて考えると、「太い」は太さ次元の無標語、「細い」は有標語となり、無標語の「太い」が「細い」よりも先に獲得されるはずである。無標語とはある尺度における肯定的末端を示し、有標語とは否定的末端を示す。「長い—短い」を例に考えると以下のようになる。長いも短いも長さ尺度の両端を示しており、この尺度には肯定方向と否定方向がある。例えば板を長くするには長さを加えなければならないが、板を短くするときには長さを減らさねばならない。つまり長いのは尺度の肯定的末端を、短いのは否定的末端を示している (クラーク, H. H. ら 1987)。

しかし先行研究の結果はそうではなかった。久慈 (1981) によると、4才6ヶ月～5才5ヶ月の子どもでは、「太い」よりも「細い」が先に獲得されるという結果が見られた。また本郷 (1982) では、理解過程において年長児 (平均6才1ヶ月) で「太い」よりも「細い」の方がわずかではあるが正答数が多い結果となった。この結果から本郷は、有標語と無標語との差は

次元によってまちまちではないか、と述べている。さらに岩田（1986）は絵図版を用いた調査を行っているが、やはり「太い－細い」については意味素性仮説では説明しきれない結果となっている。足立ら（2001）は円柱の積み木を使用して調査を行ったが、「細い」円柱を正しく答えることについては年少児、年中児、年長児間で年齢差は無く、かなり早い時期に「細い」の理解が可能であった。一方「太い」円柱を正しく答えることについては年齢差がみられ、他の先行研究と同様、意味素性仮説では説明出来ない結果となっている。

このように「太い－細い」に関しては意味素性仮説では説明出来ない結果となっているが、それは何故であろうか。村石（1990）は幼児の意味習得の順序性を有価性によって説明しようとする探索的な試みとして、大学生を対象に語の連想と有価性について調査を行っている。調査結果から、幼児を対象にした場合「有価」の表現では指示が徹底する事は不可能であり、「有価」に代わる「好きなもの・嫌いなもの」等の表現を用いた教示をしていく必要があると指摘している。

幼児の言語獲得の順序性をことばに対する「好き・嫌い」によって説明出来るかを考えるためには、そもそも幼児がことばに対して「好き・嫌い」をもっているかを明らかにする必要がある。そこで本研究では子どもはことばに対して大人のように「好き・嫌い」を持っているのかどうか、持っているとしたらそれはどのようなものなのかを明らかにしていく事を目的とする。

方法

対象児：各年齢とも男女各12人づつ、合計72人を対象に調査を行った。各年齢については、年少児はおおよそ4才（3才10ヶ月～4才1ヶ月）、年中児はおおよそ5才（4才11ヶ月～5才1ヶ月）、年長児はおおよそ6才（5才11ヶ月～6才1ヶ月）になるように配慮した。

手続き：対象児と調査者が向き合って座り、個別面接の形で進められた。対象児に「今から言うことばは好きか、嫌いか、どっちでもないか教えてね。」と説明し、対象児が何を答えればいいのか理解できたかを確認した。その後「太いということばは好きかな、嫌いかな、どっちでもないかな？」と尋ねた。子どもが答えたら、「どうして？どうしてそう思うのかな？」と好き・嫌いの理由を尋ねた。質問は、太い－細いの順番で行った。

結果

まずは年齢間を区別せず、幼児全体がもっていることばの好き・嫌いをみる。その後各年齢における違いをまとめる。

「太い－細い」の反応をまとめた図1より、幼児は「細い」を好き、「太い」を嫌いと答える傾向があることがわかる（ $\chi^2=13.94$, $df=2$, $p<.01$ ）。なおグラフ内の数字は人数を表してい

る。つまり「太い」を「好き」と答えたのは31人いた、という事になる。またその他とは、「どちらでもない」と無反応をあわせたものである。

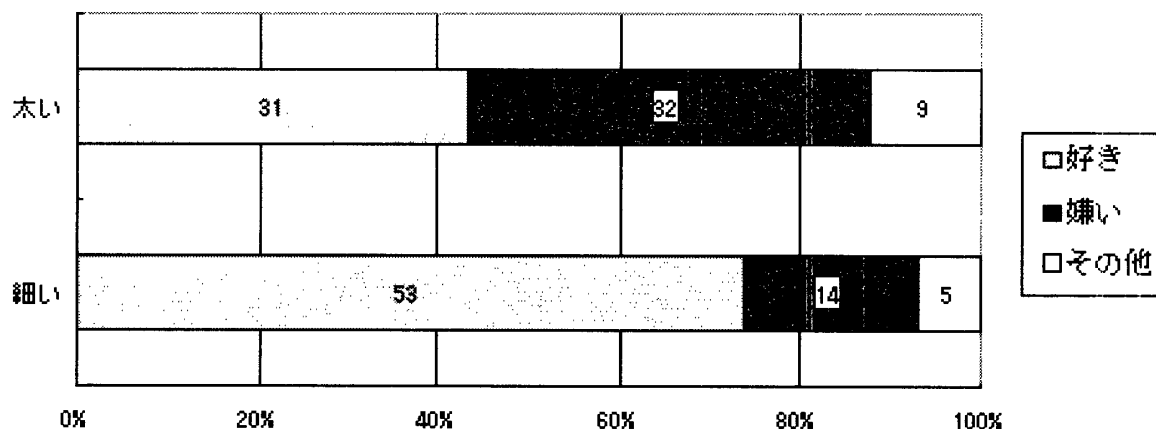


図1 「太い」「細い」に対する「好き・嫌い」の反応について

次に各年齢ごとに集計したものが図2と図3である。グラフの横の数字は人数を表している。「太い」については「好き・嫌い」に年齢差がみられた ($\chi^2=6.17$, $df=2$, $p<.05$)。年少児は「太い」を好きと答え、年中児は嫌いと答えていることがわかる。一方「細い」については年齢差はみられず、年少、年中、年長児とも好きと答えていた。

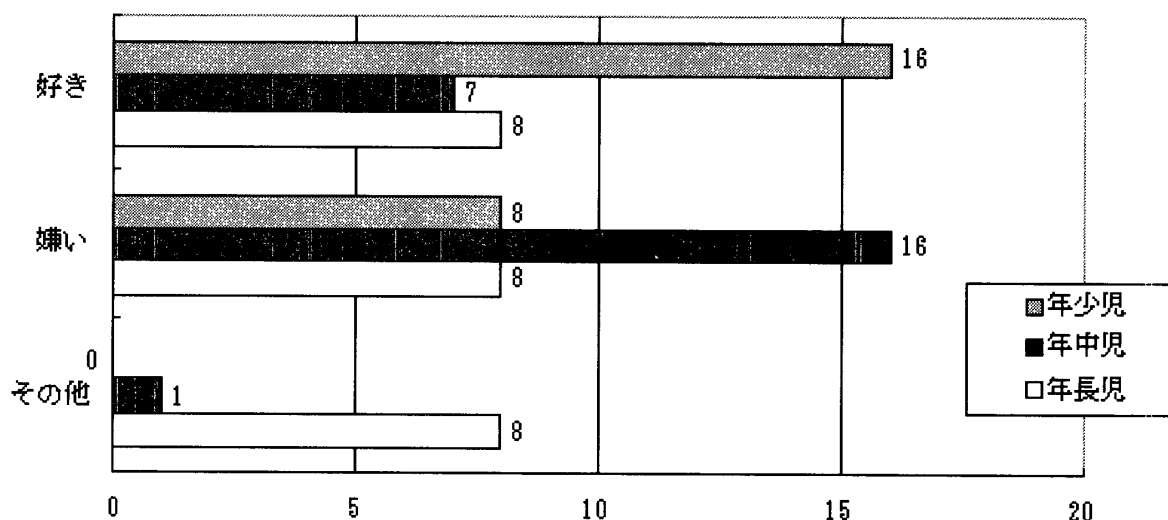


図2 「太い」に対する「好き・嫌い」について

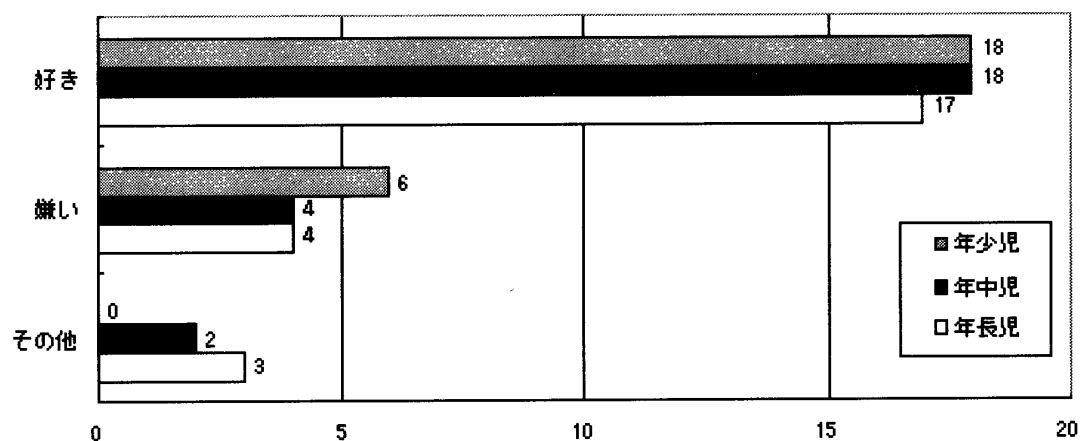


図3 「細い」に対する「好き・嫌い」について

表1-1 「太い」に対する好き・嫌いの理由づけ（年少児）

	理由
「好き」	わからない（3）
	どうしても（4）
	太いの、太いから
	ちっちゃいから
	おにぎりちょっとでるから
	長いのと太いのもどっちも好き
	だって大きいもん
	大きいから
	パパ
	かわいいから
「嫌い」	どうしても（2）
	わからない（4）
	でぶっちょだから
	やだから

表1-2 「細い」に対する好き・嫌いの理由付け（年少児）

	理由
「好き」	わからない（6）
	どうしても（3）
	細いから（2）
	まきまきしたいから
	細いとこんな事ができる
	好きだから細くてぺっちゃんこ
	聞いたことないから
	近いもん
	ちっちゃいもん
	やさしいだから
「嫌い」	わからない
	大きくなると持てなくなるから
	重たいのは持てないから
	小さいから
	嫌いだから嫌い
	どうしても
	細いから

表 2－1 「太い」に対する好き・嫌いの理由づけ（年中児）

	理由
「好き」	わからない
	好きだから
	うちのお母さん、太いから
	おもちゃ片づけるの早いから
	お母さんが教えてくれたから
	英語でも習ったから
	ちっちゃいとなるから
	重いからバーって落ちる
	小さいから
	サッカーみたいだから
「嫌い」	わからない（3）
	太いのは嫌い（3）
	大きいから（2）
	でぶちんになっちゃうから
	好き嫌いだから
	ぶたさんだから
	嫌いだから嫌い
	デブみたいだから
	どっかに入らない時があるから
	太すぎて長すぎるから
「どちらでもない」	
言えない	

表 2－2 「細い」に対する好き・嫌いの理由付け（年中児）

	理由
「好き」	わからない（5）
	細いから（3）
	小さいのが好き（2）
	好きだから
	うちのお父さん、小さいの
	ぶっとくならないから
	知っているから
	長いから
	かわいいから
	言うのが難しい
「嫌い」	どっかにすぐに入っちゃうから
	片づけがめんどくさくないから
	細いモノを遊ぶと面白い
	わかんない（2）
	長すぎて、細すぎる
	大きいから
	「どちらでもない」
	さっき片づけたから
	わからない

また各ことばに対する「好き・嫌い」における理由づけをまとめたものが表 1－1 から表 3－2 である。各理由づけの横の（ ）の数字は、その理由づけをした人数である。年少児では「何故好きか（嫌い）？」と尋ねられても理由を言える子どもは少ない。しかし年長児ではその子どもなりの理由を言えていると思われる。

表 3 - 1 「太い」に対する好き・嫌いの理由づけ（年長児）

	理由
「好き」	わからない（3） 大きいから 乗ったりとか出来るから 好きだから 字が簡単だから ボールとかあるから 木が太いからすき
「嫌い」	重たいから（2） わからない（2） 運動会で走れないから スピーカーの大きいから 大きな音がでるから 変な風に見えるから 太っているみたいだから
「どちらでもない」	わからない（2） 何の字でも好きだから なんでもいいから 太い方だったら、太いに見えるから 変わらないから どっちでもないから 太い積み木とか、細い積み木とか いろいろあるから

表 3 - 2 「細い」に対する好き・嫌いの理由付け（年長児）

	理由
「好き」	わからない（6） 細いから（2） 剣を作るとき、その方がかっこいいから かたいから 積み木とかで後ろにつけたり、 周りに置いたりするのに便利 先生達が時間を教えてくれる いっぱい走れるから 棒みたいに打てるから 煙突にのれるから 細い方がみんなも同じだから 風船とかあるから
「嫌い」	低いから わからない 細いと狭い 小さいのは遊べない
「どちらでもない」	関係ないから 太いのも細いのも使うから 細かったら速く走れるから

考察

まず、子どもは大人と同じようにことばに対して「好き・嫌い」を持っているのか、持っているとしたらそれはどのようなものかについて考察する。その後、今後に残された課題について述べる。

子どもはことばに対して「好き・嫌い」を持っているかについては、結果をみる限り持っていると言えよう。大学生を対象とした村石（1990）の結果では、「太い」は有価性なしの反応が多く、「細い」はいずれか判断出来ないという反応が多かった。調査方法の違いがあるので単純に比較は出来ないが、子どもも大人も「太い」を嫌いと答える傾向があるようだ。子どもにとっても大人にとっても「太い」ということばは何らかのネガティブな印象や連想をさせることばのようである。一方「細い」については、子どもは好きなのに対して、大人はどちらでもないという結果である。「細い」については子どもから大人への発達過程で、何らかの価値観やことばに対する印象が変わっていくことばなのかもしれない。

次に「好き・嫌い」の理由づけについて考えていく。表1-1、1-2より年少児はそのことばが「好き」か「嫌い」かは答えられるが、その理由を説明出来るほどではないことがわかる。一方年中児の「好き」の理由づけの中には（表2-1、2-2参照）、お母さん、お父さんといった子どもにとって非常に身近な人物が出てくる。単順に太い体型の人や小さい人が好きだから「太い-細い」ということばが好きなわけではない。「うちのお母さん、太いの」「うちのお父さん、小さいの」のようにその人物が好きだから、その人物が持っている特徴や属性が好き、ということであろう。「嫌い」の理由にはお母さん、お父さんは出てこないのも興味深い点である。意味獲得やことばに対する印象を、他者との人間関係からも形成していることが伺える一例ではないかと思われる。また「太い」を嫌いとした理由をみると、「でぶちゃん」「ぶたさん」「でぶ」のように大人からみても確かにネガティブでマイナスな印象を受ける理由が出ている。年中児ぐらいになると、何らかの形で大人の価値観が子どもの中に入ってくるのかもしれない。

年長児になると理由づけにも変化がみられる（表3-1、3-2参照）。「細い」を好きな理由をみると、「剣をつくるとき、かっこいいから」「積み木とかで」「棒みたいに打てるから」といったように、具体的な事物の名称が出てくる。これは年少、年中児にはみられず、年長児の特徴と思われる。年少、年中児の理由づけは「細いから」「長いから」「小さいのが好き」といったように、他の次元形容詞を使った説明が多くみられる。だが年長児では自分が遊んでいるおもちゃや周囲にある事物に関連した説明をしている。また「太い」を嫌いとした理由に「運動会で走れない」があるように、自分の身体を使って体験したことからことばの「好き・嫌い」を判断していることがわかる。つまり、年長児は自分が経験したり、体感したものを通してことばの意味理解や印象を形成しているように思われる。もちろん年少、年中児も身体を通じた経験を日々重ねてはいるが、年中児にみられた他者との関係からの意味形成の上に、年長児は自分が行った中での印象や感覚に注目しているのではないかと思われる。また年長児の特徴としては「太い」に対して「どちらでもない」とする子どもがいることである。「太い積み木とか、細い積み木とかいろいろあるから」と、事物の特徴の多様性に気がついているよ

うである。年少児は「好き」か「嫌い」の二者択一的な単純な判断なのに対して、年長児では「どちらでもない」という第三の選択肢も考慮に入れて、より複雑な判断が出来ているようだ。

次に今後に残された課題について考えてみたい。まず第一には、大人がもっている「太いー細い」に対する「好き・嫌い」とその理由を明らかにしていく必要がある。村石（1990）では語に対する有価性と連想語についての調査であって、何故有価性があるのかといった理由づけについては明らかになっていない。大人がもつ理由づけを明らかにし、幼児の理由づけと比較検討していくことが必要である。また今回は「好き」イコール「有価性あり」、「嫌い」イコール「有価性なし」と考えて調査を行ったが、この点についても検証をしていく必要が残されている。

また幼児に対する調査についても考えなくてはいけない。村石（1990）は語に対する有価性が意味獲得の順序性を説明する要因となるかもしれないと考えているが、その点については明らかにはなっていない。確かに今回の調査から、幼児であってもことばに対する「好き・嫌い」を持っていることはわかったが、それが即順序性の説明要因とはなり得ない。意味獲得の順序性と「好き・嫌い」の間にどのような関係があるのかは、さらにきめ細かい調査を行う必要がある。例えば同一対象児に対して今回のような「好き・嫌い」テストと、そのことばを理解しているのかどうかを問うような課題を一緒に行うことによって、子どもの持っている理解とことばに対する印象がどのような関係になっているかが見えてくるかもしれない。

今回は「太いー細い」に焦点を絞った調査であったが、次元形容詞全体の中での関係も考えていく必要がある。國廣（1982）は言語学の知見から、次元形容詞の意味的相互関係はひとつの立体に組み立てることが可能であり、その構造はわれわれの空間的認識を反映していると述べている。次元形容詞どうしが立体的な構造をもっているのであれば、「太いー細い」だけではなく他の次元形容詞の理解、そのことばに対する「好き・嫌い」を明らかにし、その関係の中で「太いー細い」を捉えていくことで新たな側面が見えてくるであろう。

さらに意味素性仮説そのものの検討も残されている。「太いー細い」については意味素性仮説では説明出来ない結果となっているが、そもそも意味素性仮説では「太いー細い」を説明できない限界をもった仮説である、という可能性もある。先行研究等で得られた結果や知見をふまえた検討が必要である。また、意味素性仮説で子どもの言語獲得のどの範囲まで説明できるのかも考えていく必要がある。Clarke, E. V（1973）は子どもにおける言語獲得一般についてこの仮説で説明できると考えていたが、はたしてそうなのだろうか。次元形容詞については説明可能だが、他の形容詞についてはどうなのか、それ以外の品詞（例えば動詞）ではどうなのか等も検討を加え、明らかにしていくことが必要である。

文献

- 足立自朗・小沢恵美子 2001 幼児における次元形容詞の理解と獲得について ―太い・細いを中心に― 埼玉大学紀要教育学部（教育科学）50（1）、57－62
- Clark, E. V. 1973 What's in a word? On the child's acquisition of semantics in his first language. In T. E. Moore (Eds.), Cognitive development and the acquisition of language. New York : Academic Press. 65－297
- クラーク H. H・クラーク E. V 1987 心理言語学 下 ―心とことばの研究― 藤永保他訳 新曜社
- 林部英雄 1977 幼児の語彙習得に関する実験的研究 ―指示的意味と関係的意味の問題― 特殊教育研究施設報告 15、1－10
- 本郷一夫 1982 幼児における空間的量を表す形容詞対の獲得について 教育心理学研究 30、46－53
- 岩田純一 1986 空間的な量を表す概念と言葉の発達（1） 金沢大学教育学部紀要（教育科学編）35、1－17
- 久慈洋子 1981 空間的な量を表す形容詞の獲得について 堀素子・F. Cパン編著 言語習得の諸相 ―幼児言語学シリーズ3― 文化評論出版社 208－231
- 國廣哲弥 1982 意味論の方法 大修館書店
- 村石昭三 1990 語の連想と有価性の関係 埼玉大学紀要教育学部（教育科学）39（2）、1－21